

原著論文

受付：2019. 9. 9

受理：2020. 2.21

介護観の形成に影響を与える因子に関する研究
—— 介護福祉士養成課程で学ぶ大学生を対象に ——

水 谷 なおみ

日本福祉大学 健康科学部

藤 原 秀 子

日本福祉大学 健康科学部

丹 羽 啓 子

日本福祉大学 健康科学部

武 田 啓 子

日本福祉大学 健康科学部

間 瀬 敬 子

日本福祉大学 健康科学部

久 世 淳 子

日本福祉大学 健康科学部

A study on factors affecting the development process of KAIGOKAN
among university students in an education course for certified care workers

Naomi Mizutani

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Hideko Fujiwara

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Niwa

Aichi Branch of Japanese Tree Doctor Association

Keiko Takeda

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Mase

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Junko Kuze

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract: [Purpose] The purpose of this study is to examine factors affecting the development of KAIGOKAN. [Method] The subjects of this study were 28 seniors in an education course for certified care workers who wrote an essay on "experiences and situations that made you interested in caring for the first time." The description was analyzed using inductive coding. [Results] Six factors affecting the developmental process of KAIGOKAN were identified: family care, community, volunteer, user, supervisors, reflection, and meaning of care. [Conclusion] The participants were affected by family care or community, volunteer in their early life before they entered the university, and these factors acted as the basis for the development of KAIGOKAN. After they entered university, the effects of users and supervisors in care practice were reflected in their practice and enabled them to internalize KAIGOKAN. The meaning of care also interacted with other factors promoting the development of KAIGOKAN.

Keywords: university students in education course for certified care workers, developmental process of KAIGOKAN, affecting factor, care practice, meaning of care (大学生, 介護観形成, 影響因子, 介護実習, 介護の意味付け)

1. はじめに

現在、介護現場は人材不足が加速し危機的状況にある。2017（平成 29）年度の介護労働実態調査によれば、離職者の 67.2% が勤務年数 3 年未満であり、小規模の事業所ほど離職者の勤続年数が短い結果となっている¹⁾。離職には、業務に関連する心身の不調や職場の理念や運営に対する不満、人間関係の問題、低賃金など雇用管理のあり方が影響している²⁾。また、2015（平成 27）年に公表された「2025 年に向けた介護人材にかかる需給推計（確定値）について」では、現状のまま推移した場合、2025 年に介護人材は、全国で 37.7 万人不足するとされており³⁾、人材の確保・定着が喫緊の課題である。こうした実態を踏まえ、我が国は介護分野への多様な人材参入を急速に進めている。その結果、優先すべきは量の確保という風潮が高まるのもやむを得ないことであろう。

しかし、その一方で「介護の質の向上」に向けた努力を忘れてはならない。介護の質の向上は、利用者の望む生活の実現、即ち利用者の生活の質の向上と密接に関係している。山下⁴⁾は「利用者の生活の質の向上のためには、そこで提供されている介護の質が問われ、その介護の質はそこで働く介護職員一人ひとりの介護観に左右される」と述べている。利用者の生活の質の向上はあくまでも利用者本人の価値観に立つものであり、簡単なことではないが、介護者が自らの介護観をもとに介護実践を積み介護の質を高めていくことは重要な視点と言える。

2. 先行研究の概観と問題意識の明確化

では、介護観とは何か。先行研究によると「介護職員が介護の仕事に取り組む際によって立つ価値観や態度」⁵⁾「大事にする価値観やこだわり」⁶⁾あるいは「介護に対す

る考え方・見方であり、対象者の理解や支援の方向性を決定する際の基本となるもの」⁷⁾⁸⁾とされている。一方、介護福祉学辞典⁹⁾では、「介護観の変遷」について述べているが、ここで示す介護観は先行研究とは異なり、社会一般的な介護に対する見方と理解できる。このように、介護観の意味合いはさまざまで、今のところ明確な定義は存在しない。

それゆえに、介護観について、いくつかの有用な研究がされて来た。それら研究の対象者は大きく 3 つに分類することができる。1 つ目は、家族介護者を対象とした藤本ら¹⁰⁾木村ら¹¹⁾森山ら¹²⁾の研究である。2 つ目は、介護職員を対象とした藤井ら⁶⁾白石ら⁵⁾の研究である。3 つ目は、本調査と同様に介護福祉士養成校（以下、養成校）で学ぶ学生を対象とした研究である。本稿では 3 つ目に焦点をあて先行研究を概観することで、本研究の位置づけを明らかにする。

まず、介護観の構成要素に着目した研究として木村¹³⁾が挙げられる。木村は学生のレポートから介護観の構成要素を検討し、「理念的」「身体的介護」「自らの成長ややりがい」「不安や困惑」「模索」「介護の適性」の 6 つを抽出した。また、介護観は学生の経験により常に再構成され不確実性を有すことを指摘している。

養成校の学生を対象とした研究として多いのは、介護観から教育や実習の効果を検証した研究である。介護観から教育や実習の効果を検証した吉田ら¹⁴⁾の研究では、各学年に共通する介護観として「実習についての感情・思い」「生活支援技術」「介護に関する価値」「利用者主体のケア」「実習の態度」「利用者像」「介護過程」「実習の場」の 8 つを抽出し、さらに 3 年次には「地域における多職種連携」、4 年次には「認知症利用者の理解」が

追加され、年次が進むと介護観が多様化することを示した。橘内¹⁵⁾は、学生に対し入学直後、1段階実習終了後、2段階実習終了後に介護観に係わる調査を行っている。その結果、学生は実習を重ねるにつれ「その方に応じた介護」「その人の望む生活の援助」という言葉を遣うようになると指摘する。宮下¹⁶⁾・間瀬ら¹⁷⁾・藤原ら¹⁸⁾も同様に、教育や実習経験は、学生の介護観の形成に影響を与えていることを報告している。さらに、石田ら⁷⁾の研究によれば、卒業直前の学生は「科学性」「倫理性」に裏付けられた「個性性」を大切にすると介護観を持つとされる。その介護観と2009年度からの新カリキュラムで教育された学生の介護観を、鴻上ら¹⁹⁾は比較分析した。その結果「個性性」の具体的内容として、寄り添う支援や対象者理解の視点が大幅に増加し、新カリキュラムの特徴である介護過程重視の教育の影響が考えられると結論づけた。

また、横山ら²⁰⁾は、学生は実習を含めた学習を通して介護観を形成しているとしたうえで、教育の課題として、在宅介護、余暇生活援助、終末期ケアを積極的に取り入れることの必要性を示唆した。さらに山下⁴⁾は、学生の介護観を明らかにしたうえで、介護について根拠をもとに説明する能力を高めることや、離職につながる不安を早期に解消するための卒後教育の必要性についても言及している。

以上これらの研究を概観すると、養成校の学生を対象とした介護観の研究は、介護観の構成要素を明らかにするもの、あるいは学生の介護観から教育・実習の効果を評価する研究が殆どである。このように教育と実習経験によって学生は介護観を言語化、内面化し肯定的な介護観を形成することは分かっているが、具体的にどのような経験や状況に影響を受け介護観を形成するのかについて深く立ち入った研究は少ない。況してや、養成校入学前まで遡り、その影響を調査したものはなく、影響を与える要因を構造的に整理した研究も見当たらない。それゆえ、介護観の形成に、影響を与える具体的な経験や状況を明らかにすることは、介護観形成に効果的な教育内容を導き出すための示唆を得ることができ、その点に本研究の意義があると考えられる。

3. 目的

本研究は、介護観の形成に影響を与える因子（経験・状況）とその時期について検討することを目的とする。

時期については、大学入学前と入学後の因子の影響に着目する。

4. 調査方法

4.1 調査対象・調査時期

4年制大学の介護福祉士養成校で学ぶ4年生28名を対象とした。調査時期は2016年11月である。

4.2 調査方法

学生には事前に、文章と口頭で調査の趣旨および方法を説明し、同意の得られた学生に、自由記述式の質問紙調査を実施した。調査項目は、(1)介護で大切にしたいこと・介護に対する思いや考え、(2)介護に対しての自分の思いが芽生えた経験や状況、(3)介護総合実習終了時（2年次）からの介護観の変化とした。

4.3 分析方法

介護観の形成に影響を与える因子について検討するため、本研究では、調査項目(1)介護に対しての自分の思いが芽生えた経験や状況に焦点を当て分析を行った。

学生の具体的な経験や状況をもとに汎用性のある原理や法則を導き出すために、分析には、帰納的コーディング²¹⁾を用いた。まず、記述内容から分析テーマに関する文脈を抜き取り、要約・分類する作業を行った。次に、要約・分類されたデータの意味解釈および概念生成を繰り返して行い、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。さらにカテゴリーをより抽象度の高い概念的コードに移行し、影響因子であるコアカテゴリーを明らかにした（表1）。次に、その影響因子がいつ頃のことなのかを把握するため、影響因子の要約データを、大学生・高校生・中学生・小学生・大学入学以前（時期不明）に分類・整理した（表2）。最後にこれらのカテゴリーを構造化することにより、介護観の形成に影響を与える因子を可視化した。分析にあたっては、看護・介護の現場を経験した研究者および質的研究に精通した5名の研究者から、データの分類やカテゴリー名の妥当性について助言を受け、内容を精査し、分析結果の客観性を担保した。

4.4 倫理的配慮

本調査は、本学の「人を対象とする研究」に関する倫理委員会規程に従い実施した。学生には事前に、調査の趣旨と方法、調査への参加協力は自由意思に基づくこと、

表 1 介護に対しての自分の思いが芽生えた経験や状況

コアカテゴリー (影響因子)	カテゴリー	サブカテゴリー	要約データ(103件)	n=103	
				件数	%
介護の意味付け	社会貢献できる仕事	人の役に立つ仕事	・人の役に立つことがしたい ・誰かのためになる事をしたい ・将来、役立つ仕事 ・人の役に立つ仕事 ・助けたい、役に立ちたいと言う思いがある ・疲たきりで過ごされている方へ何かできないか ・杖を使用されている方へ何かできないか ・高齢者の役に立つ仕事	27	26.2
		人助け	・困っている人を助ける事に魅力を感じた ・転倒しそうになっている方に対して手伝えることはないか ・人の助けになることがしたい		
	介護のやりがい	介護のやりがい	・とてもやりがいのある仕事 ・訪問介護さんのやりがいある姿 ・実習を通し介護のやりがいを感じた ・介護の難しさややりがいを感じる		
	介護の楽しさ	介護の楽しさ	・人のために何かする楽しみを実感 ・実習を通し介護の楽しさを知った ・楽しんで頂ける介護がしたい		
	介護福祉士資格の取得	介護福祉士資格の取得	・介護の資格を取得 ・介護福祉士の資格を取得		
	人と関わる仕事	人と関わる仕事	・人と関わりながら仕事につきたかった ・お年寄りに関わることが好き		
	安心して頂く介護	安心して頂ける介護	・安心して頂ける介護		
	素晴らしい介護	介護は素晴らしい	・介護は素晴らしい		
	介護の仕事に就きたい思い	介護の仕事に就きたい思い	・介護の仕事につきたい思いの芽生え		
	介護への不安	介護できるか不安	・大変なところも分かった介護できるか不安		
家族の介護	介護する家族の姿	祖母の介護する姿	・祖母の介護から介護の思いが芽生える ・祖母が祖父を介護する姿に興味がある ・祖母が祖父の介護をおこなっている姿 ・祖母の介護疲れ	22	21.3
		母の大変な姿	・母が一人で介護と家事をする大変な姿		
	変化する祖父母の姿	祖父の症状・障害	・寝たきりになった祖父 ・祖父が認知症で変わる姿		
		祖母の症状・障害	・祖母がくも膜下出血で倒れ介護を要した ・祖母の認知症や骨折		
	心のつながり	祖母との心のつながり	・祖母との心のつながり		
		祖父との会話	・祖父との会話		
		祖父へ寄り添う	・祖父に寄り添うことができればという思い		
		曾祖母の笑顔	・曾祖母に笑顔でありがとうと言われた経験		
	介護の手伝い	介護の手伝い	・祖母の介護の手伝い ・曾祖母の介護の手伝い ・祖母の介護の手伝い		
		両親を手伝いたい思い	・母を手伝いたい思い ・専門的な知識を身に付け両親を支えたい ・将来は両親を見たい自分の思い		
利用者との関わり	利用者との多様な関わり	寄り添う経験	・寄り添うことで利用者に安心感を持って頂いた経験	20	19.4
		担当利用者との関わり	・利用者とかかわりながら身をもって体感 ・不慣れになりやすい担当利用者との関わり ・受け持ち利用者との日々の関わり		
		ターミナル利用者との関わり	・ターミナルの利用者との関わり		
		障害児との関わり	・障害児デイサービスでの関わり		
		デイサービス利用者との関係	・デイサービスのご利用者との関係		
		利用者主体	・利用者主体というイメージがついた		
	利用者の姿	利用者の姿	・利用者の自由に過ごされている姿 ・生き生きとされた利用者 ・小さい缶ビールを飲んでいる利用者の姿 ・その人らしく生活する姿		
		利用者とのコミュニケーション	・利用者の状態に合わせたコミュニケーションに苦労 ・利用者と話し一歩に歩く ・利用者とのコミュニケーションが増加		
	アセスメント	利用者の思いに気づく	・言葉に表れない利用者の思いに気づく		
		可能性に目を向ける	・利用者の持つ強みや可能性に目を向ける		
省察	自己の介護実践の見直し	介護について考え直す	・実習の間介護への考えを改める ・経験を通しより介護について考える ・介護の大変さを知ること ・自身の介助方法の陥りに気付いた	14	13.6
		利用者に対する認識を改める	・自尊心とは何か改めて考える ・信頼関係とは何か疑問を持つ ・利用者主体というイメージがついた		
		利用者との向き合い方	・不慣れになるご利用者との出会い ・実習を通し不慣れな利用者向き合う大切さに気付く		
	知識・技術不足の認識	知識・技術の不足	・知識が増えれば祖父にもっとしてあげたのではないか ・介護に関する知識の不足		
		正しい知識	・何もすることができないことに気づき正しい知識を持ちたい		
	介護福祉士という言葉の理由	客観的に見る力の不足	・自分を客観的に見る力の不足		
		介護福祉士という言葉の理由	・「介護福祉士」に「福祉」という言葉が入る理由を考えた		
指導者との関わり	指導者の助言・指導	指導者の助言	・職員助言をもとにした観察	11	10.7
		職員の指摘	・指導者の方からの助言		
		指導者の話し	・担当職員の厳しい指摘 ・職員の自尊心に関する話し		
		指導者の寄り添う姿	・介護実習Ⅲの時の指導者の話し		
	ロールモデル	専門職同士のカンファレンス	・職員の利用者寄り添う姿 ・専門職同士が根拠あるカンファレンスをする姿		
		目標となる職員	・目標となる職員の存在		
	専門職としての言動	専門職の言葉や行動	・知識や考えがしっかりとっている専門職の言葉や行動に納得		
		専門職が患者に与える影響	・専門職の行動が患者に与える影響		
ボランティア体験	ボランティア体験	高齢者施設でのボランティア体験	・高齢者施設での演奏会活動	5	4.9
		老人ホームのボランティア体験	・老人ホームのボランティアで行った介護体験		
		児童ボランティア体験	・児童ボランティア		
		地域ボランティアへの参加	・地域のボランティアへの参加		
地域理解	地域の高齢化	居住地の高齢化	・高齢化した地域に住んでいた	4	3.9
		高齢者の現状	・高齢者のことが好き		
		高齢者の現状を知る	・高齢者が住む現状を知る		
		高齢者・障害者との交流の場	・高齢者や障害者と交流する地域交流会の場		

103 100

表2 時期ごとの影響因子

[illegible]

成績には影響しないこと、また個人が特定されない形で介護教育の研究対象として利用することを文章および口頭で説明した。そのうえで、同意書に署名することにより承諾を得た。

4.5 用語の定義

本調査では介護観を「介護で大切にしたいこと・介護に対する思いや考え」（思いは、信念・価値に相当するレベル）と定義した。

5. 結果

有効回答者数は28名（100％）で、男性9名（32％）、女性19名（68％）であった。以下、コアカテゴリーは【 】、カテゴリーは「 」、サブカテゴリーは《 》で示す。

5.1 介護観の形成に影響を与える因子（以下、影響因子）について

学生の記述から抽出された要約データは103件であった。そのデータをもとに、57個のサブカテゴリーと30個のカテゴリーを生成し、そこから影響因子となる7個のコアカテゴリーを抽出した。要約データ数が多かった影響因子は、順に【介護の意味付け】27件（26.2％）、【家族の介護】22件（21.3％）、【利用者との関わり】20件（19.4％）、【省察】14件（13.6％）、【指導者との関わり】11件（10.7％）、【ボランティア体験】5件（4.9％）、【地域理解】4件（3.9％）であった（表1）。

以下では、上位3つの影響因子について結果を示す。まず、【介護の意味付け】のカテゴリーは「社会貢献できる仕事」「やりがいのある仕事」「楽しい仕事」「介護福祉士資格の取得」「人と関わる仕事」「安心して頂く介護実践」「素晴らしい仕事」「介護の仕事に就きたい思い」「介護への不安」の9個、サブカテゴリーとして《人の役に立つ仕事》《人を助ける仕事》《やりがいのある仕事》《介護の楽しさ》《介護福祉士資格の取得》《人と関わる仕事》《安心して頂く介護を行う》《介護は素晴らしい》《介護の仕事に就きたい思い》《介護できるか不安》の10個が生成された。

次に【家族の介護】のカテゴリーは「介護する家族の姿」「変化する祖父母の姿」「心のつながり」「介護の手伝い」「両親を助けたい思い」「将来への不安」「介護福祉士の親」の7個、サブカテゴリーとして《祖母の介護

する姿》《母の介護する姿》《祖父の症状・障害》《祖母の症状・障害》《祖母との心のつながり》《祖父母との会話》《祖父へ寄り添う》《曾祖母の笑顔》《介護の手伝い》《助けたい思い》《両親を見たい思い》《介護に対する将来への不安》《介護福祉士として働く親》の13個が生成された。

最後に【利用者との関わり】のカテゴリーは「利用者との多様な関わり」「利用者の姿」「利用者とのコミュニケーション」「アセスメント」「利用者の言葉と笑顔」の5個、サブカテゴリーとして《寄り添う経験》《担当利用者との関わり》《ターミナル利用者との関わり》《障害児との関わり》《デイサービス利用者との関わり》《利用者主体》《利用者の姿》《利用者とのコミュニケーション》《利用者の思いに気づく》《可能性を見つける》《多面的に見る》《利用者の言葉と笑顔》の12個が生成された。

5.2 因子の影響を受けた時期について

以下、時期ごとに結果を示す（表2）。小学生は【家族の介護】3件（2.9％）【介護の意味付け】1件（1％）、中学生は【家族の介護】7件（6.8％）、【介護の意味付け】5件（4.8％）、【ボランティア体験】3件（2.9％）、高校生は【家族の介護】5件（4.8％）、【介護の意味付け】3件（2.9％）、【ボランティア体験】1件（1％）、【地域理解】1件（1％）、【省察】1件（1％）であった。また、時期は不明であるが大学入学以前に関する記述は【介護の意味付け】10件（9.7％）、【家族の介護】3件（2.9％）、【地域理解】3件（2.9％）、【ボランティア体験】1件（1％）、であった。

大学生は【利用者との関わり】20件（19.4％）、【指導者との関わり】11件（10.7％）【省察】13件（12.6％）【介護の意味付け】8件（7.8％）【家族の介護】4件（3.9％）であった。以上より、大学入学以前と入学後で比較すると、大学入学以前47件（45.6％）、入学後が56件（54.4％）となる。

6. 考察

本研究の目的は、介護観の形成に影響を与える因子（経験・状況）とその時期について検討することであった。ここでは、7つの影響因子の大学入学前・後に着目する。

主に大学入学以前に影響を及ぼしていたものが【家族

の介護】【ボランティア体験】【地域理解】である。【家族の介護】からは、認知症や障害の進行により「変化する祖父母の姿」や、祖父母を「介護する家族の姿」に影響を受け介護に対する思いが芽生えていることが分かる。学生は「介護の手伝い」を通し、祖父母の笑顔に触れ、祖父母から感謝の言葉を受け取るなかで「心のつながり」を深めていく、一方「介護する家族の姿」を目の当たりにし「両親を助けたい」と使命感に近い感情を抱く学生も存在する。【家族の介護】の経験や状況についての記述は22件(21.3%)であり、そのうち大学入学以前の記述が18件と、8割を占めていた(表2)。藤若ら²²⁾も、祖父母との親密性が高い孫世代は、家族介護意識と社会的介護意識の両方が高いと報告しており、学生の介護に対する思いの芽生えには家族の影響があることが示唆された。また、サブカテゴリーから、学生は大学入学以前に、曾祖母、祖父母、両親との関係において、介護にかかわるさまざまな生活体験をしていることが分かる。このような生活体験の学びが少なからず現在の学生の成長や介護に対する考え方に影響している。

また【ボランティア体験】【地域理解】に関する記述は全て入学以前の経験や状況であり、具体的には《高齢者施設でのボランティア体験》や《地域ボランティアへの参加》によって、学生は高齢者や障害者に対するイメージが変化し、人のために何かできることの楽しさを実感する。つまり、フォーマル・インフォーマルな社会資源の中に身を置き、地域のなかで生活する高齢者や障害者の生活状況を肌で感じ取ることで、介護に対する興味・関心が高まると考えられる。以上から、大学入学までは、主に【家族の介護】【ボランティア体験】【地域理解】によって、介護に対する思いが芽生え育まれることが分かった。

次に、大学入学後に影響を及ぼしていたものが【利用者との関わり】【指導者との関わり】【省察】である。これらは学生の記述内容から判断し介護実習中の経験および状況と言える。表2の結果より【利用者との関わり】は、大学入学後、最も影響を及ぼしている因子となった。カテゴリーに見られる「利用者との多様な関わり」と一口に言っても、《寄り添う経験》《担当利用者との関わり》《ターミナル利用者との関わり》《障害児との関わり》などその内容はさまざま、学生は、利用者の生き生きとした姿を目にすることや、利用者から笑顔を引き出すことができた経験をもとに、自己の介護観を形成し

て行く。また、学生は的確な「アセスメント」に基づく介護実践を通し《利用者の思いに気づく》《可能性を見つける》ことの重要性を実感し、学内で学んだ基礎的な知識や技術を実践で活かすことの必要性を理解することで、より介護に対する思いが強くなると考えられる。

実習中は【指導者との関わり】の影響も大きい。学生は《指導者の助言》や《指導者の寄り添う姿》に影響を受け、自己の実習課題の発見に努めていた。利用者の生活歴や障害の程度はさまざま、実習中は学内で学んだ知識や技術では対応できない問題に直面することもあり、指導者によるスーパービジョンは、自己をより深く知っていくための手段でもある²³⁾。また、学生は、利用者に寄り添う指導者の姿を手本に、介護者としてあるべき姿勢を学んだと記載している。つまり、指導者という「ロールモデル」によって、学生は技術や具体的な行動を学び学習意欲を高めていくと考えられる。このことから「専門職としての言動」は、学生の成長に重要な役割を果たし、学生が介護観を築いていくうえで影響を与える一つの因子と言える。

そして、学生は自己【省察】によって、《介護について考え直す》《利用者に対する認識を改める》《利用者との向き合い方》など、介護実践を振り返っていることが分かる。そのきっかけとなる経験について、記述の中では、不穏になりやすい利用者へ上手く対応できない、ターミナルの利用者に何かできることはないか、良かれと思った介助方法で利用者を危険にさらしてしまい、自身の介助方法の誤りに気付いたなど、困惑や葛藤が記され、その経験が新たな介護方法の模索につながっていることがうかがえた。畑中ら²⁴⁾は、看護観形成において自己の看護が揺らぐ体験に直面したとき、不安や困惑などの感情を抱えつつ体験に向き合うことの必要性を指摘し「内的な体験と自己の看護の考え方とのやり取りを通じて、自己の看護の考え方に影響する新たな気づきを得ることができる」と述べている。同様に介護実習における内的体験の積み上げが、学生の介護に対する考え方を広げ深めることにつながっていると推察できる。

つまり、介護観の形成には、【利用者との関わり】【指導者との関わり】で生じる内的体験の積み上げと、それに伴う自己【省察】の機会が必要であることが示された。

最後は【介護の意味付け】について考えてみる。本調査の結果では【介護の意味付け】27件(26.2%)のうち、大学入学以前は19件(18.4%)、入学後は8件(7.8

%)と、学生が【介護の意味付け】を経験する時期は、大学入学前の比重が高いことが分かった。小学生の時に既に介護の仕事に就きたいという思いが芽生えていた学生もいる。中学生、高校生と経験を積むにつれ、人の役に立つことがしたい、人を助けたいという思いから、介護福祉士の資格取得という具体的な目標に変化していることも特徴である。また、主に特定の時期で影響を及ぼす他の影響因子とは異なり、すべての時期において影響を及ぼす傾向を示した。

例えば、小学生の頃に、曾祖母の介護の手伝いやボランティア活動を通し《やりがいのある仕事》だと感じた、あるいは、小学生の時、老人ホームへボランティアに行き《介護の楽しさ》を実感した、また、中学生の頃から《人の役に立つ仕事》に就きたいと思っていた、介護実習中に利用者からありがとうと笑顔で言われた時《介護は素晴らしい》と思ったなど、このような経験をもとに、学生は介護を肯定的に受け止めるようになる。

石田ら⁷⁾は、学生の卒業時の介護観を検討し、科学性・倫理性・個性性という3つの介護観を明らかにしている。そして倫理性の一つの構成要素として「仕事の価値観」を抽出している。そこには、学生が介護の仕事に魅力を感じることや、介護の仕事の楽しみを見つけることなどが含まれていた。本研究でも、介護に対しての自分の思いが芽生えた経験や状況を学生に記述してもらったが、その結果、大学生の時期には介護の楽しさや素晴らしさを感じた経験が記されていた。このことから、学生の介

護観は、介護に対しての自分の思いが芽生えた経験や状況、つまり【介護の意味付け】もあって形成されていることが分かる。それは、介護実習で介護を実践する事の難しさと同時に、面白さ、やりがいを感じ、介護という職業の魅力を身をもって経験したことにより、介護観として言語化、内面化される⁷⁾と考えられる。それを証するように、介護実習を経験しない大学入学以前の記述は、人を助けたい、人の役にたちたいという思いに止まる傾向にあった。【介護の意味付け】は、介護に対する思いが芽生えた時から、本人の意識に内在し、新たな経験を積むごとに変化する。また、他の影響因子との相互作用のなかで【介護の意味付け】を繰り返していくことが介護観の形成につながると考える。

7. 結論

学生の介護観の形成に影響を与える因子として、【家族の介護】【ボランティア体験】【地域理解】【利用者との関わり】【指導者との関わり】【省察】【介護の意味付け】の7因子が抽出された。

学生は、大学入学前の生活体験のなかで【家族の介護】【ボランティア体験】【地域理解】から影響を受け、介護観の基盤となる考え方を育む。大学入学後は、介護実習における【利用者との関わり】や【指導者との関わり】、さらに自己【省察】によって、新たな介護観を内的に形成していく。また他の因子と影響し合う【介護の意味付け】は、介護観の形成を促進することが示された(図1)。

8. 本研究の意義と残された課題

本研究は、介護学生の介護観形成に影響を与える因子(経験・状況)を明らかにし、その因子の影響のあった時期を時系列に整理することで、互いの関係性や影響力を検討した。しかし、あくまでも4年次の学生の介護観からみたひとつの結果である。そのため、一定の調査対象者を継続的に調査することで介護観形成に影響を与える因子をより詳細に把握し、介護観形成を促進する具体的方策を明らかにすることが、今後の研究にとって一つの課題ではないかと考えている。

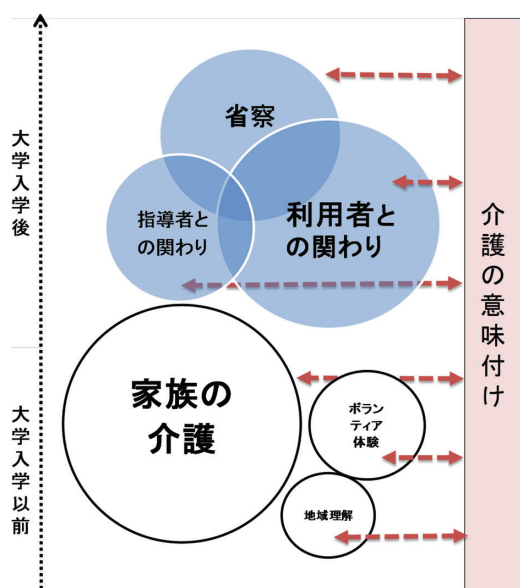


図1 介護観の形成に影響を与える因子の構造化

謝辞

本調査にご協力頂きました学生のみな様に厚くお礼申し上げます。なお、本論文は、JSPS 科研費 JP16K04717 における研究の一部です。記して感謝いたします。

引用文献

- 1) 公益財団法人介護労働安定センター：「介護労働の現状について」平成 29 年度介護労働実態調査。(2018)
- 2) 公益財団法人社会福祉振興・試験センター：平成 27 年度社会福祉士・介護福祉士就労状況調査。
<http://www.sssc.or.jp//touroku/results/index_h27.html> 2018 年 3 月 27 日アクセス
- 3) 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室：2025 年に向けた介護人材にかかる需給推計(確定値)について (2015)
- 4) 山下喜代美：卒業を直前にした介護福祉コースの学生の介護観と今後の不安。東京福祉大学大学院紀要, 1 (1), pp. 39-47 (2010)
- 5) 白石旬子, 大塚武則, 影山優子, ほか：介護老人福祉施設の介護職員の「介護観」に関する研究。介護福祉学, 17 (2), pp. 164-175 (2010)
- 6) 藤井賢一郎, 白石旬子, 大塚武則, ほか：介護職員の『介護観』に関する研究 (その 1) 『介護観』と介護に対する介護職員の意識・態度。老年社会科学, 31 (2), pp. 301 (2009)
- 7) 石田京子, 小田史, 田中真佐恵, ほか：短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討 授業・実習との関連と新カリキュラムへの課題。大阪健康福祉短期大学紀要, 31, pp. 3-13 (2011)
- 8) 越野美貴, 多田朱里, 桜井志保美：看護実習後の看護学部生の介護観 在宅看護分野からの考察。石川看護雑誌, 15, pp. 109-115 (2018)
- 9) 日本介護福祉学会事典編纂委員会編：介護福祉学辞典。初版, ミネルヴァ書房, 京都, pp. 416-417 (2014)
- 10) 藤本幹, 田中義人, 近藤和美, ほか：寝たきり高齢者の主介護者が抱く介護観の分析。作業療法, 22 (2), pp. 129-139 (2003)
- 11) 木村千絵, 河野あゆみ, 金谷志子, ほか：在宅で老親を介護する未婚子の介護生活への対応と介護観。訪問看護と介護, 16 (8), pp. 663-668 (2011)
- 12) 森山恵美, 關優美子：配偶者間介護に対する女性高齢者の介護観の様相。神奈川歯科大学短期大学部紀要, 1, pp. 95-103 (2014)
- 13) 木村淳也：介護観に関する考察 (1) 介護福祉士養成施設における学生のレポートから。医療福祉研究, 5, pp. 13-24 (2009)
- 14) 吉田清子, 鈴木聖子, 阿部明子, ほか：介護観の分析からみた介護実習の効果評価研究。岩手県立大学社会福祉学部紀要, 17, pp. 43-49 (2015)
- 15) 橋内真理子：専攻科学生の介護観に関する一考察。福島学院大学・福島学院短期大学研究紀要, 35, pp. 117-125 (2003)
- 16) 宮下榮子：介護福祉士養成教育における「介護観」構築のための「終末期介護」教育の実践報告 学生の意識調査による検証。新潟医福誌, 9 (2), pp. 20-24 (2009)
- 17) 間瀬敬子, 久世淳子, 武田啓子, ほか：4 年制大学で学ぶ介護学生の介護に対する考え方の変化 入学後半年間の学び。日本福祉大学健康科学論集, 21, pp. 45-51 (2018)
- 18) 藤原秀子, 武田啓子, 水谷なおみ, ほか：介護総合実習履修前における学生の介護に対する考え方, 日本福祉大学健康科学論集, 21, pp. 53-59 (2018)
- 19) 鴻上圭太, 石田京子, 辻本乃理子, ほか：新カリキュラムの効果と課題 短期大学における学生の卒業時の介護観の検討 (続報)。大阪健康福祉短期大学紀要, 12-13, pp. 23-32 (2014)
- 20) 横山正博, 三原博光：介護福祉士養成施設の学生の介護に関する意識調査。川崎医療福祉学会誌, 8 (1), pp. 31-37 (1998)
- 21) 佐藤郁哉：質的データ分析法。初版, 93, 新曜社, 東京 (2008)
- 22) 藤若恵美, 進藤貴子, 永田博：孫世代の高齢者介護観と介助に対する自信 祖父母との親密性と介護経験との関連。川崎医療福祉学会誌, 19 (2), pp. 351-357 (2010)
- 23) 認知症介護研究・研修東京センター：新しい認知症介護 実践リーダー編。第 2 版, 中央法規出版, 東京, pp. 154 (2006)
- 24) 畑中純子, 伊藤収：看護観が体験から発展するまでの看護師の思考のプロセス。日本看護科学会誌, 36, pp. 163-171 (2016)